

待降節第2主日の説教

金 大烈 神父 2010年12月5日(日)

《そうせずにはいられないことだから》

皆様、感謝致します。皆様がグループ別に話し合い、発表される姿を見て、いろいろなことを感じました。

今日のこの黙想会で私の一番のねらいは、皆様に同じテーブルで一緒に話し合う機会を持ってもらうことでした。

二番目のねらいは、自分だけが思っているのではない、という共感を体験してもらうことでした。問題と感じていることや聞きたいと思っていることでも、共感出来ることを体験してほしかったのです。

そして三番目には、各グループが話し合ってまとめたものが、地区長さんを通して私に届けられると思います。それが私の役に立つと思いました。たぶん使わせていただくことになるでしょう。私は、皆様が話されている内容を聞いてはいないのですが、どんな話が出るのか予想はしていました。今発表された内容を聞くと、ほとんど予想通りでした。決して嬉しいとは言えないのですが、可能性があること、また自分の予想が外れていないことを感じました。

今、ヨーロッパの教会はほとんど死んでいると言ってよい状態です。生きてると言えそうな教会は、アジアにしかありません。これからのカトリック教会のビジョンを冷静に考えてみると、アジアの教会がヨーロッパの教会も生かさなければならぬと私は感じています。しかし実際には、アジアの教会にもいろいろな問題があります。歴史的問題、文化的問題、習慣的問題、それらが複雑に絡みあっています。それがアジア全体の流れです。

アジアは漢字の文化を持っています。漢字の影響を受けた「^{じょう}情」の文化です。そして、1プラス1が2になることまでは考えられなくても、2があることを予想できる合理論的な文化です。一方、西洋の文化は、一つ、二つ、三つ、と一つずつ数えて10まで到達しないと「10になる」という結論を出せません。アジアの私たちは、「神様はいらっしゃるのだらう。」という考えから始めます。「だから善い生き方をしなければならないのだらう。」とすでに分かった上で生き方を選びます。しかし西洋の人々は、喧嘩をして初めて、「喧嘩をするのはつらい。人を殺すのは大きい罪になる。」と思うのです。結論までたどり着いて、やっといろいろな話ができるのが西洋人の考え方です。いわゆる経験論的な思考です。

ですからアジアの教会は、ある意味で教会の未来、世界の教会の未来を背負って行く可能性をたくさん持っていると思います。しかし、私たちはいろいろな面で足りない所をたくさん持っています。西洋の教会と比べたら、赤ちゃんの教会です。アジアの中で一番長いカトリックの歴史を持っているのはインドと日本です。この太田教会は、その日本の教会の中の一つです。

皆様はどう思われるか分かりませんが、私が4年前に初めてこの教会に来た時に感じたことは、働き手がある、タレント(才能)、カリスマ性を持っている人がそろっている共同体だ、ということです。それは、否定的に考えれば一致しにくい共同体になるかもしれません。しかし、もしそれぞれの才能を一つにすることができれば、どの共同体よりも強い力となり、他の共同体の模範となり、引っ張って行ける共同体になると私は思いました。そして、この教会には20代の若い人もたくさんいます。私はそれらの若い人達のためにも計画を立てています。

私が今まで皆様に見せてきた司牧のやり方は手始めで、来年からは本格的な司牧をしたいと思います。それは、皆様にとっても疲れることになると思います。しかし、今までの4年間で十分に鍛錬されたて来たと思います。いろいろなことを通して、知らず知らずのうちにある程度私に慣れていらっしやうと信じています。慣れて来たところから更に少しだけ力を入れれば、皆様は十分に先に行けるはずですよ。ですから心配なさないようにお願いします。

そしてもう一つのねらいは、地区です。今日の黙想会では、皆様を地区別に分けましたね。その理由は何でしょうか。今年が始まる前に、私は、各地区が小さい小教区のような共同体となって動き始めなければならぬと強く言いました。身近な人々と顔を合わせて、いろいろな苦労、いろいろな喜びを分かち合いながら前へ進まなければならないのです。

ある地区から「同じ地区に外国籍の信者さんがこんなにたくさんいるのに初めて気がついた。」という発表がありましたね。実際にこの教会に所属するはずの人は、どのくらいいると思いますか？ 教区によると、外国籍の人も含めると、およそ1万5千人がこの大泉・太田地区にいると考えられています。しかし、その9割以上は教会に所属していません。そういうことも、全部整える作業を始めなければなりません。

そろそろ皆様は、お腹がすかれた頃でしょう。お腹がすいたら何を求めますか。食事を求めますね。宣教や信仰も全く同じです。今日の話合いでは、ほとんどのグループが「宣教しようとは思いますが、やり方が分からない。」という話になっていました。しかし、根本的に言えば全て信仰なのです。信仰的にお腹がすき、渴き果てたら、私たちは仕方なく信仰を求めます。信仰を求めて、体験ができれば、意識しなくても自然に人に手を伸ばします。「本当によかった。だから、あなたも一緒に行こう。」とすぐに言えます。

もちろん、文化のためにいろいろな難しいこともあります。日本の社会は、善いことをするのさえ迷惑になる社会です。善いことを勧めたくても、相手にとってその善いことが迷惑になるのではないかとためらってしまう文化です。しかし、その文化をきれいに活用できれば、何倍もの力を持ち、相手に傷を与えずに、本当に立派なものだけをあげられると私は思います。そして、熱し易く冷め易い文化でもありません。だから、時間がかかっても信仰を自分のものにできれば、それを最後まで持ち続けられると思います。そういう意味で、いろいろ勉強をしましょう。

宣教というのは難しいものです。宣教学という学問さえあります。しかしその宣教学を作ったヨー

ロッパは、死んだようになってしまいました。私たちは、私たちにあう宣教学を勉強しましょう。近いうちにそのような時間を作りたいと思います。

今日は、111人の方がこの分かち合いに参加してくださいました。私はとても嬉しかったです。この方々は、やろうとすれば出来る方です。私はそのように判断しています。近いうちに「宣教について勉強をしましょう」というお誘いをすると思います。その時には、是非積極的に参加をしてください。そして、各地区長を中心に、地区の方々が一つになって、よい方向に行きましょう。それが一番良いことだと思います。

最後に、コリントの信徒への手紙一の9章16節から23節を分かち合いたいと思います。ゆっくり読ませていただきます。

「もっとも、わたしが福音を告げ知らせても、それはわたしの誇りにはなりません。そうせざるにいられないことだからです。福音を告げ知らせないなら、わたしは不幸なのです。自分からそうしているなら、報酬を得るでしょう。しかし、強いられてするなら、それは、ゆだねられている務めなのです。では、わたしの報酬とは何でしょうか。それは、福音を告げ知らせるときにそれを無報酬で伝え、福音を伝えるわたしが当然持っている権利を用いないということです。

わたしは、だれに対しても自由な者ですが、すべての人の奴隷になりました。できるだけ多くの人を得るためです。ユダヤ人に対しては、ユダヤ人のようになりました。ユダヤ人を得るためです。律法に支配されている人に対しては、わたし自身はそうではないのですが、律法に支配されている人のようになりました。律法に支配されている人を得るためです。また、わたしは神の律法を持っていないわけではなく、キリストの律法に従っているのですが、律法を持たない人に対しては、律法を持たない人のようになりました。律法を持たない人を得るためです。弱い人に対しては弱い人のようになりました。弱い人を得るためです。すべての人に対してすべてのものになりました。何とかして何人かでも救うためです。福音のためなら、わたしはどんなことでもします。それは、わたしが福音に共にあずかる者となるためです。」

父と子と聖霊とのみによって。アーメン